河正雄コレクション　資料集　第４号

Ｅｇａｍｉ　　Etsu

江上　越

2021 年 8 月

河正雄コレクション　資料集　第４号

江上　越

2021 年 8 月

発行にあたって

江上越は日本、中国、ヨーロッパを中心に活躍する若手アーティスト。2021年4月、フォーブス・アジアが発表した「世界を変える30歳未満の30人」に選出された。令和2（2020）年度の文化庁新進芸術家海外派遣プログラムにも選ばれ、ニューヨークを訪れた。ここ数年、展覧会に出品された作品がすべて完売するという驚きの人気と実力を誇る。自身の豊富な海外体験から、「本当のコミュニケーションとは何か」について現代アートを通じて問い続けている。

河正雄は、在日韓国人の画家の作品を初めて広く認識させた在日2世の美術コレクター。生涯をかけて収集した1万5千点にもおよぶ美術作品を社会に還元（公的美術館への寄贈）することを通して、日本と韓国という〈二つの祖国〉を結ぶ懸け橋の役割を果たしてきた。コンセプトは平和への祈りであり、不幸な歴史の中で犠牲となった人々への慰霊だ。国境、民族、宗教などさまざまな〈境界〉を越えるヒューマニズムの精神が、河正雄の根底に流れている。

江上越と河正雄は昨年12月に初めて出会う。二人を良く知る美術評論家、千葉成夫が縁を取り持った。年齢も出自も異なる二人だが共に惹かれ合った。「若くて才能にあふれている。人の心を読む呪術師のようだ」と河正雄。一方の江上越は「輝き続けている人だ」と振り返る。二人の邂逅（かいこう）から、江上越が河正雄を描いた20枚の肖像画「コミュニケーション」が生まれた。

河正雄を描いた「コミュニケーション」は、江上越が試行錯誤の末にたどり着いた「にじいろ（虹色）」という作品群に入る。「にじいろ」はスピード感あふれる色鮮やかな幅広の線（ストローク）で構成されているのが特徴。具象表現が不可欠だった肖像画の既成概念を打ち破り、抽象的な線だけで江上越流の新しい肖像画を生み出した。千葉成夫は「社会と世界のなかで生きてきた河正雄の心模様であり、心の在り様である」「『心の窓』が開かれている」と評している。

では「にじいろ」とは何だろう。「虹とは夢と希望の象徴。それぞれの色は美しいが、けっして交わらない」と江上越。「共存の在り方を示している」とも話していた。いうなれば「にじいろ」は、制作者自身（江上越）と主題（河正雄）の「心の窓」をつなぐ虹の懸け橋ではないか。「国や民族、宗教、文化、言葉が違っていても、虹のように美しく輝くことができる」。そんなメッセージが江上越の作品から聞こえてくる。

一人一人違う人間の個性を認め合い、尊重する考えは人権とヒューマニズムの原点だ。江上越と河正雄の二人は、「心の窓」の最深部で〈人権とヒューマニズム〉が結びつき、響き合っているのではないだろうか。

（敬称略）

2021年8月

菊地 正志（きくち・まさし）　ジャーナリスト、
埼玉新聞記者。埼玉新聞社経済部長、文化くらし部長、
編集委員などを歴任。1958年生まれ。さいたま市在住。

■目次

はじめに
発刊にあたって …… 2
河正雄コレクションとは …… 4

Ⅰ　コミュニケーション
コミュニケーションの本質（河正雄） …… 6
江上越×河正雄「コミュニケーション」 …… 7

Ⅱ　評論（千葉成夫「江上越論」）
心の皺 …… 48
絵画へ－江上越の展開 …… 53
江上越の試み－顔が伝えるもの …… 56
江上越の「誤聴ゲーム」 …… 57

Ⅲ　江上越プロフィル …… 59

Ⅳ　目録 …… 63

河正雄コレクションとは

河正雄コレクションは、在日韓国人２世で実業家の河正雄が約５５年かけて収集した１万２千余点の美術作品群。河正雄はメセナ（文化・芸術の支援）精神と「分かちあう心の美学」を実践している先駆者で、収集したすべての美術作品を文化・芸術の発展のために、韓国・光州市立美術館をはじめ、霊岩郡立河正雄美術館や秋田県仙北市立角館町平福記念美術館など、韓国と日本の公的な美術館等に寄贈している。

河正雄

一貫した方向性を持つ河正雄コレクションは、ディアスポラ（離散した民族）として歩んできた河正雄自身の人生が色濃く投影されている「祈りの美術」。社会的・政治的に恵まれていない、疎外された人々や歴史の渦の中で犠牲になった人々を追悼する祈りと慰霊の意味を持っている。さらに在日韓国人として故郷に対する運命的なあこがれ、自分を生んでくれた祖国の文化と美術への恩返しの気持ちが込められ、美術で韓国と日本を結ぶ懸け橋の役割を果たしている歴史的に貴重なコレクションである。

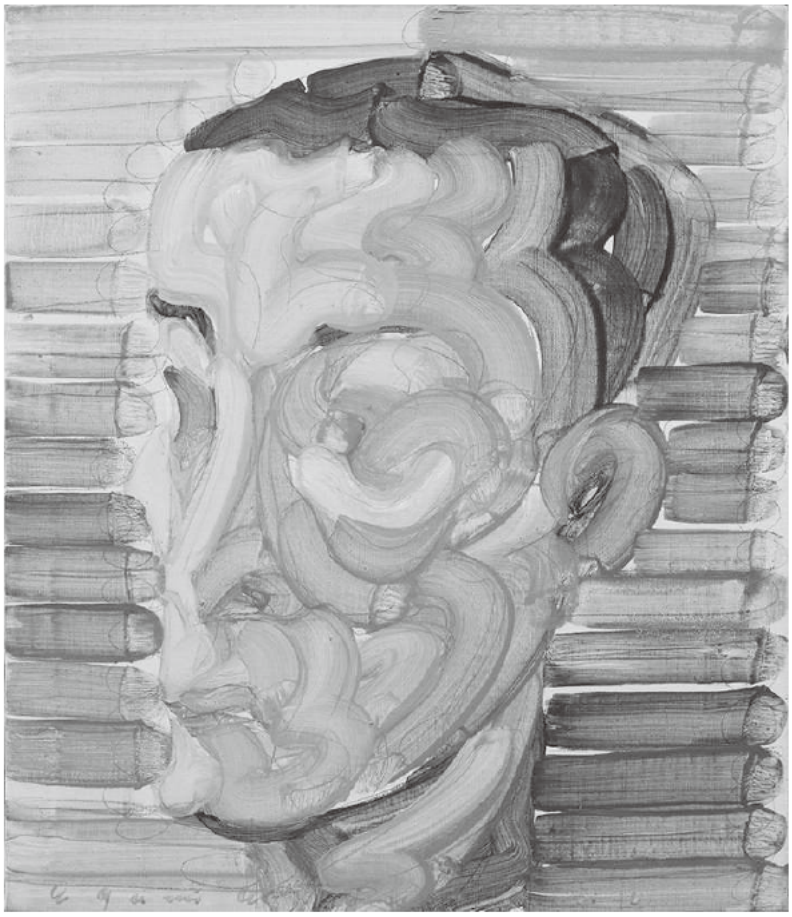
江上越の絵画作品「コミュニケーション」20 点は 2021 年２月、河正雄コレクションの一つに加わった。

東江・河正雄（ハ・ジョンウン）　1939 年 11 月３日生まれ。

59 年秋田県立秋田工業高校卒。72 年株式会社かわもと（不動産賃貸業）創立。韓国光州盲人福祉協会（81 年）と同会館（89 年）設立。2001 年終身光州市立美術館名誉館長就任。03 年韓国朝鮮大学校美術学名誉博士号授受。07 年韓国朝鮮大学校デザイン大学院客員教授就任。光州広域市・釜山広域市・ソウル市名誉市民、全羅北道名誉道民、山梨県北杜市栄誉市民。韓国の文化芸術発展に寄与した功労により、2012 年に在日韓国人で初の宝冠文化勲章を受勲した。著書に『全和凰－祈りの美術』『望郷－二つの祖国』『恨'95』『韓国と日本、二つの祖国を生きる』『二つの祖国』『祈りの美術』『念願の美術』『尋劔堂』など。晋陽河氏。

河正雄アーカイブ　https://www.ha-jw.com/

江上越×河正雄　「コミュニケーション」



コミュニケーションの本質

光州市立美術館名誉館長　河正雄

2020 年 11 月 29 日の夜、FAX が届いた。
「千葉成夫先生から御紹介いただきました江上越です。私は海外での制作経験から誤解によるコミュニケーションの本質を追求する作品を作っています。昨日、私の千葉市美術館での展示で千葉先生とパリ・ポンピドゥーセンターのキュレーターJulie と北京 UCCA 副館長と私でトークをしました。千葉先生から聞いた河さんの経験や生き方にとても共鳴し、機会がありましたらお目にかかりたいです。私は 12 月 3〜6 日に代官山ヒルサイドで展示があり、12 月 8〜13 日は千葉市美術館に在館しています。」

翌朝、「先程、千葉成夫先生から御連絡を頂き、河さんが 12 月 8 日に千葉市美術館にいらっしゃると聞きました。12 月 8 日はお昼から美術館におりますが、午後 2 時はいかがでしょうか。私の展示は千葉市美術館 1 階のエントランスギャラリーです。」と FAX が届いた。私は 12 月 8 日、私のウィキペディアを編集してくれている竹内健太氏も北京での江上さんを良く知っているというので、同道して会った。

千葉市美術館エントランスギャラリーで江上さんの作品を始めて見た時、フランシス・ベーコン（1909 年－1992 年）の絵画をイメージした。ベーコンは写真や複製を参照しながら極度にデフォルメされた奇怪な人間像を、動きのある筆致と筆触を活かし、暗鬱な色彩と重厚な絵肌で表現するイギリス美術界を代表する作家である。

江上さんの作品には東洋と西洋が混在した色彩の流れが「河」になり、大胆な筆力は明確に人の本質である「心霊」を描いているように私には見えた。

「年明けの 2 月 8 日には令和 2 年度文化庁新進芸術家海外派遣のプログラムでニューヨークに発ちます。」と話ながら、「私のコミュニケーションプログラムに参加して下さい。」と誘われた。そして「この 3 個のドングリに白のマジックペンで、先ず河さんの名字を書いて下さい。そして一番大事にしている漢字を 1 個に 1 字書いて下さい。」と言われた。私が即座に「希」「和」と書くと、その意味はと問われた。

「私が生まれた 1939 年は私の祖国は日本の植民地創氏改名法が成立して本名が使えなくなり、日本名河本正雄として名乗る事となった暗い年であった。更に日本は中国と戦争をしていた。そして太平洋戦争が勃発し、日本の敗戦後に祖国は解放された。しかし南北戦争により同族が争い、分断国家となってしまった。故に生涯を無益な戦争に翻弄されない平和な世界を希求して生きて来た。国と国、人と人でも『和』こそ尊しとする誠心を以って、切実に祈念するのです。」と答えた。

そこで「ニューヨークに発つ前に与えられた時間内で私をテーマに一期一会の作品プロジェクトを成しませんか？」と提案したところ、心が通じ「この御縁を大切にして、素晴らしいプロジェクトにしたい。」と快諾してくれた。

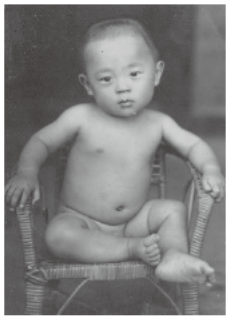
後日行われた取材後に「河さんの生きたどの時代の顔も等しく輝いている。」と言って作品制作に入った。
2021 年 2 月 6 日、「作品 20 点ようやく完成しました！　自分が渡米前のベストを尽くそうと一生懸命制作しました。途中メールをしようとも思ったのですが作品制作を考えると、時間がもったいないと感じ、没頭しておりました。」と報が届いた。そして 2 月 9 日、「無事ニューヨークにつきました。一面の雪景色でとても寒いです。作品はまだ完全に乾いていませんので、日本のアトリエで乾かしています。写真を整理しましたらまた送らせていただきます。」とメールがあった。

若き芸術家が全霊を尽くし、80 代の晩節を彩った作品 20 点を制作したことは慶賀なる記録である。私の人生哲学を投影した「心霊」を「霊魂」として描いた江上芸術の旅路に幸あれと祈念する。

コミュニケーション　HA2020　9.0cm×6.0cm×9.5cm　油彩　アクリル　2020年作

1940 年　1 歳

父と母（1971 年 9 月 16 日）



私は 1939 年 11 月 3 日大阪府布施市（現東大阪市）森河内 660 番地で生まれた。
創氏改名による通名・河本正雄、本名は河正雄。
父の名前は通名・河本憲植、本名は河憲植。母の名前は通名・河本潤金、本名は金潤金。本籍地は韓国全羅南道霊岩郡霊岩邑西南里 110 番地。父は 16 歳の時に単身、大阪に渡り 28 歳の時に仲人を通じ母と結婚したという。
18 歳の母は父の顔も知らずに結婚した。仲人に騙されて結婚したと母は言っていたが、騙されたおかげで私が生まれたのだから笑い合った。
当時、そんな話はままあったというが、真偽は今は亡き父母のみが知る話である。

生家の長屋が現存している（2020 年 12 月 3 日現在）

生家の前で

コミュニケーション－1　HA1940　3.0cm×45.5cm 油彩　キャンバス 2021 年作

1944年　4歳

この写真は1944年、4歳の時のもの。隣の赤ちゃんは霊岩で生まれた妹の河光淳（通名・河本愛子）。

撮影されたのは父母の故郷、韓国全羅南道霊岩郡霊岩邑。

当時、父は秋田県生保内村（現仙北市）で働いていたので映っていない。

秋田に居た父からの贈り物のオーバーコートを羽織っている。この写真を見ると父への情が深まっていく。

霊岩での思い出は、今の人には信じがたい話だろうが、虎が月出山から里に下りて来て村中が大騒ぎになった夜の事。日本に帰る際には麗水の港で人攫いに遭い、危ういところを母が私を取り戻してくれた事である。二人の子供を連れて無事に帰ってくれたと喜ぶ父の嬉しそうな笑顔が記憶に焼き付いている。

霊岩の親族と母（後列右より４人目）

母と霊岩で２年暮らした家

コミュニケーション−2　HA1944　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

1949 年　9 歳

この学生服姿の写真は 1949 年、生保内小学校 3 年生の時のもの。

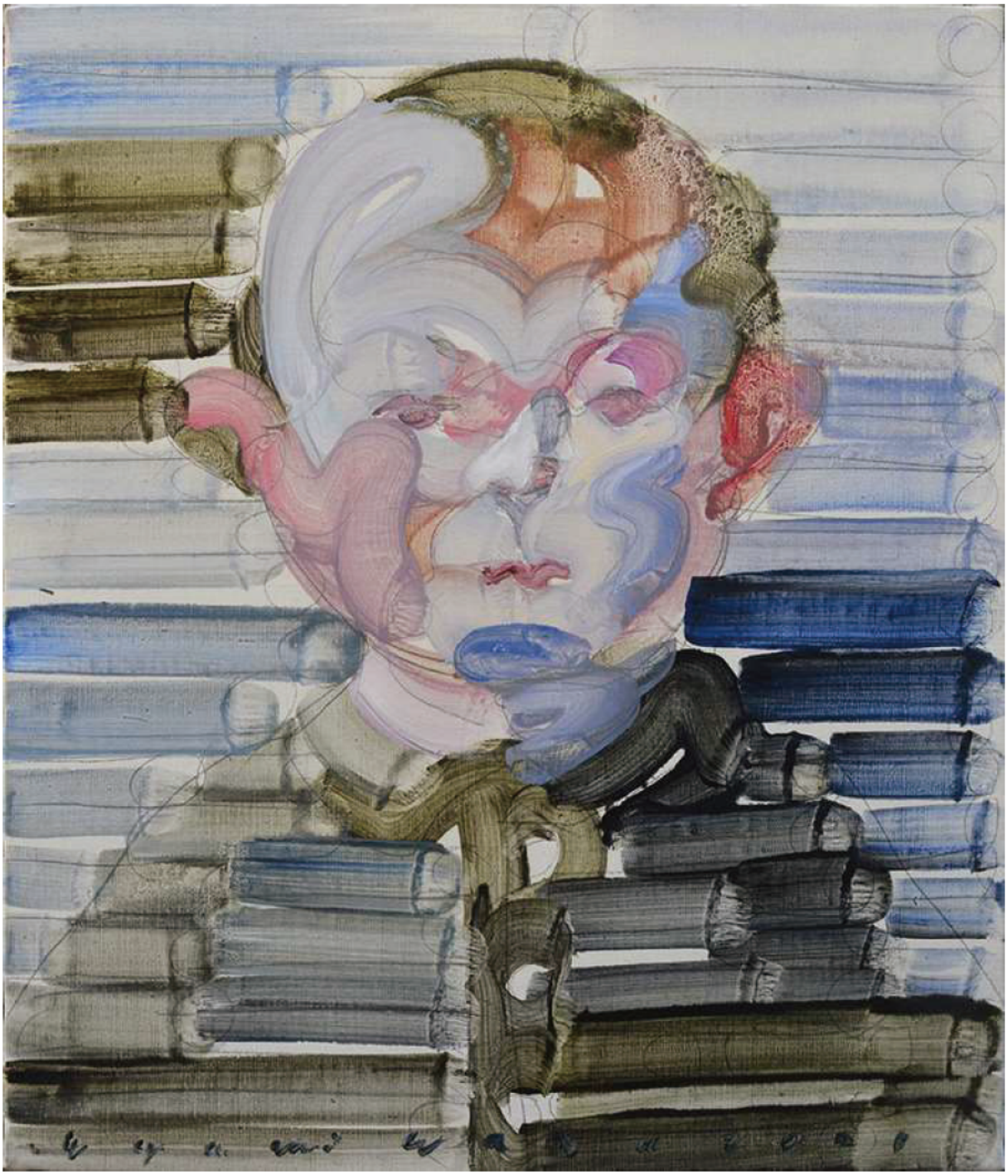
1948 年 8 月に大阪府布施市の朝聯布施初等学校（民族学校）2 年生の時、生保内小学校に転校した。

民族学校から日本の学校に移り、勉強についていくことが出来たので、学期末には昭和 23 年度優秀賞をいただいた。「大変素直で人望があり、級のリーダーとして望ましい子です。大変役立ってくれて喜んでおります。」と担任の堀井智恵子（旧姓高橋）先生から通信簿にお言葉を頂いた。

堀井智恵子先生の優しさに憧れ、教師になりたいという夢を抱いた。

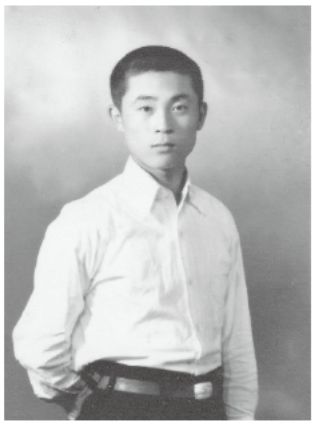
生保内の智恵子先生の自宅で

蕨の我が家での智恵子先生



コミュニケーション−3　HA1949　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

1954 年　14 歳



この写真は 1954 年、生保内中学校 1 年生の時。

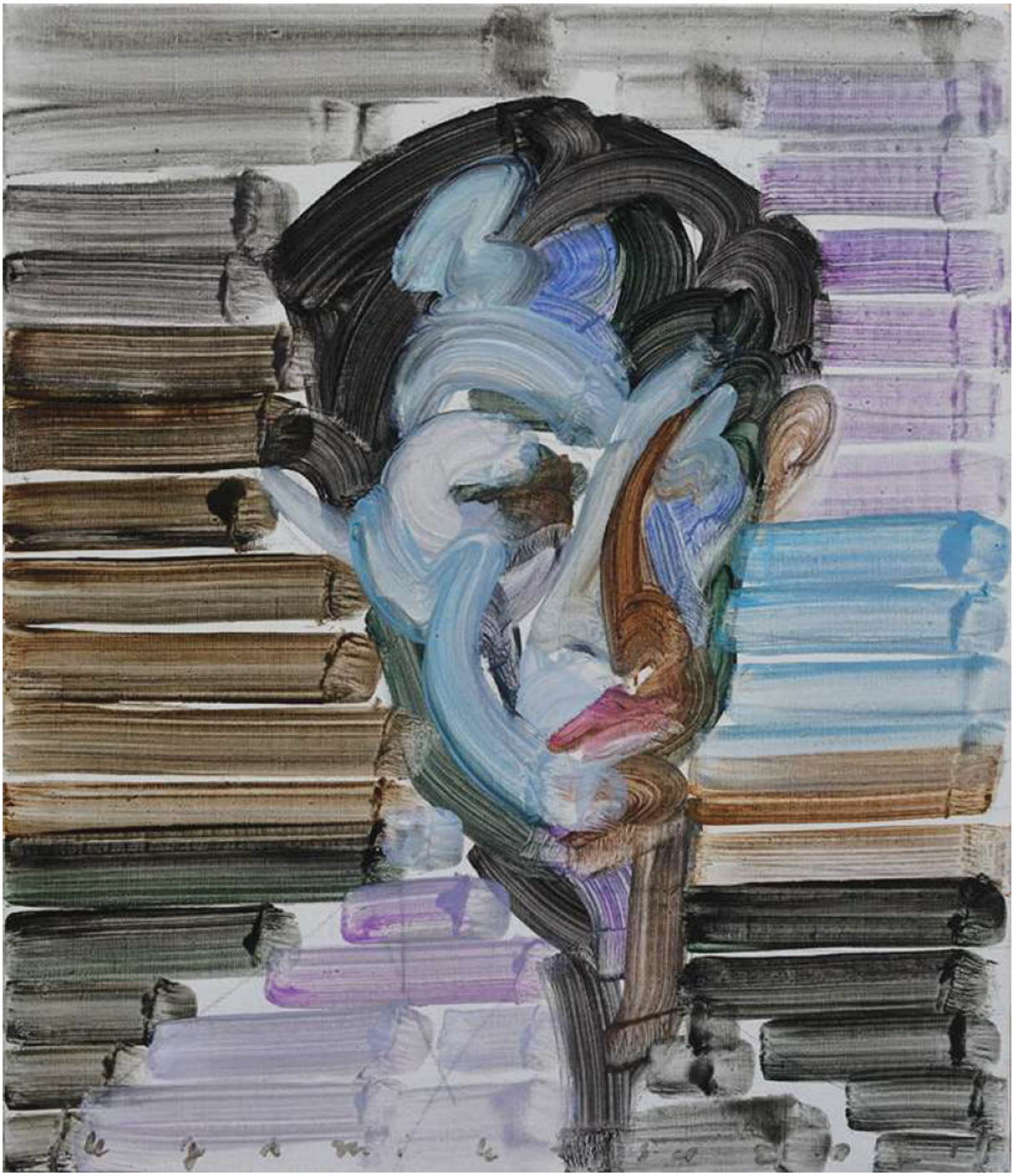
担任は松本正典先生。卒業までの 3 年間を教わった。

卒業の時、先生から「社会に出たら心を開ける真の友達を得なさい。一人でも作れれば人生の成功者になれる。不平不満や愚痴、弱音を吐かず、他人の悪口や批判、妬み嫉み、中傷誹謗、差別偏見などをするような大人になってはいけない。弱い者に味方し助ける世の為、人の為になって働く人間になるよう」にと言葉を頂いた。

三重苦の聖女ヘレン・ケラーが秋田を訪問し、障碍者を励まして光を当てた奉仕の精神を学び、クラーク博士の「少年よ大志を抱け」の励ましもあった。松本先生のような教育者になろうと志を持った。

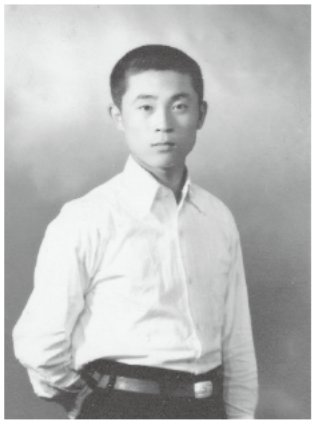
中学１年の駒ヶ岳登山。山頂で松本先生（右から２番目）と

クラスメートと松本先生



コミュニケーション－4　HA1954　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

1954 年　14 歳

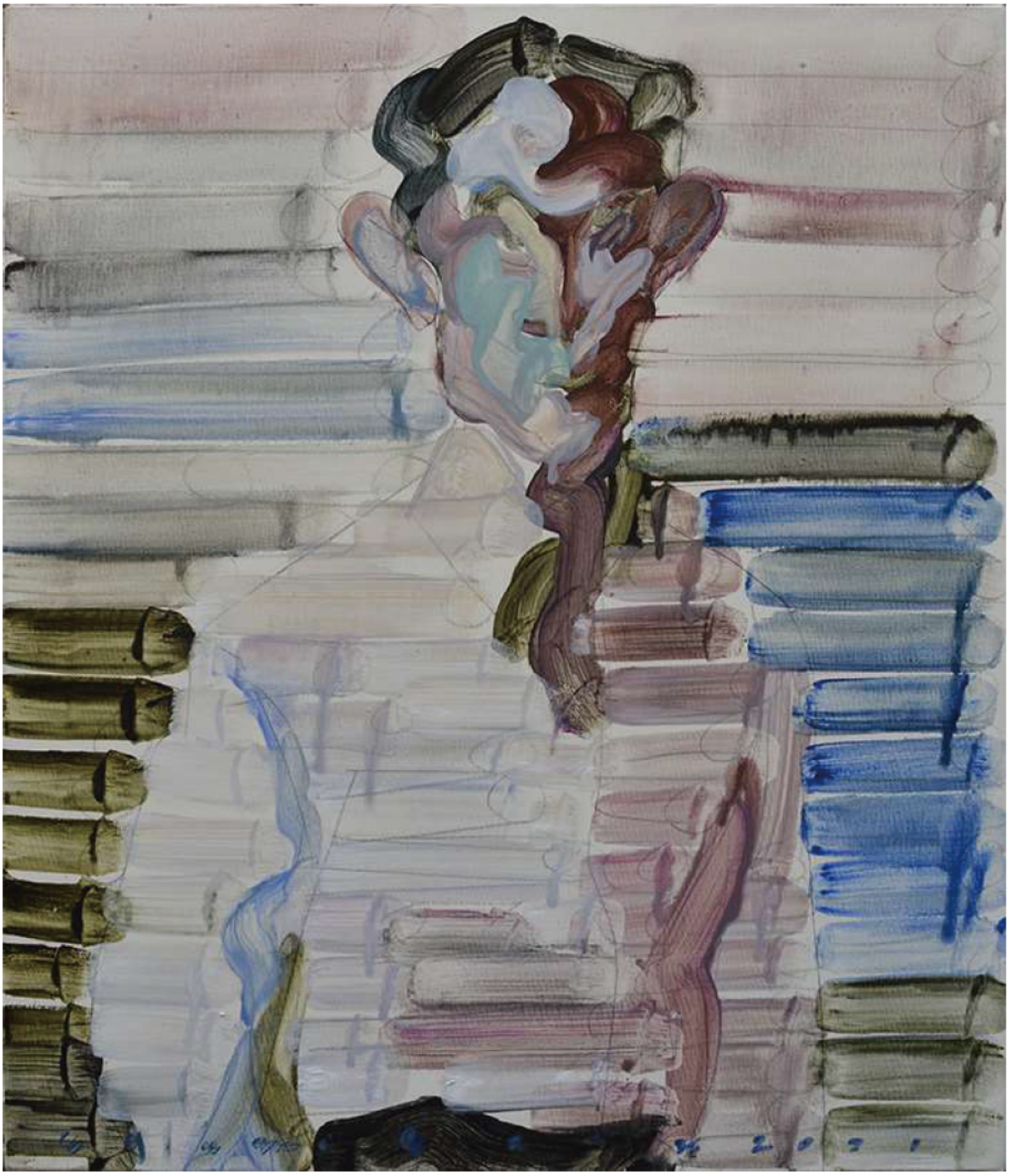


学び舎生保内中学校の 3 年間（1953 年－1956 年）は道標となった母校である。
美術世界への扉を開いてくれたのが田口資生先生。絵具や画用紙などを与えて下さり、食事まで心配して下さった。
県展で入賞した時は「これからは河本が先生だ」と持ち上げ励まして下さった。私の美術人生の出発点を担任ではなかった中島昭二郎先生は大粒の涙を流して「高校で学びなさい」と秋田工業高校進学を薦め、生涯を通して私を励まし、情をかけて下さった。
栗林新一郎校長先生は私を校長室に呼び入れ「生徒会の運営で話したい事や、やりたい事があったら何でも相談しに来なさい。」と信頼を置いて下さった。「清く正しく美しく」の校是、素晴らしき恩師達の教えは人生の道標である。

中島昭二郎先生

田口資生先生

栗林新一郎先生



コミュニケーション−5　HA1954　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

1956 年　16 歳

家族それぞれが生きて行かんとする絆を映している。家族一同が揃っている写真で、成長期の家族写真は枚数が少ない。1956 年秋田工業高校 1 年生時、父の誕生会の祝いで撮られた。

その当時、父は、山から木材や薪炭の運搬荷役をしており、母は私を高校に行かせるのだとヤミ米を東京に運び生活の助けとしていた。

妹弟 4 人は、韓国で生まれた妹が家事手伝いをし、妹弟達の面倒を見ながら生保内中学校に通った。父母が家を留守にしていた為に幼い妹弟達は淋しい思いをさせていたのは不憫だったろう。

当時の私は、朝 5 時起床で 5 時半始発の汽車に乗り、帰宅は夜 8 時半という生活で秋田工業高校に通っていた。それぞれの生活の中、束の間のシャッターチャンスが捉えた貴重な我が家族史の記憶。

汽車通学のクラスメート。秋田駅のホームにて

コミュニケーション－6　HA1956　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

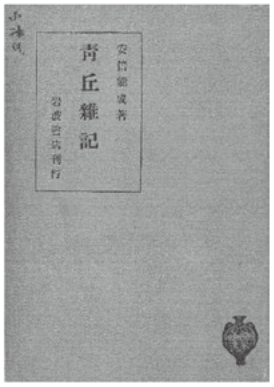
1958年　18歳

1958年、高校3年生の冬、就職の進路が決まらず悩んでいた頃の一枚。

秋田駅から千秋公園久保田城址を通る秋田工業高校への通学路。展望の美しい公園で春は桜、秋は紅葉の名所である。

写生にも良く出かけ、公園を描いた「秋のスケッチ」が秋田県高等学校美術連盟主催第9回展において秋田県教育委員長賞を受賞した。また絵画部のミーティングの場所でもあった。デートもした多感な青春時代を過ごした公園。

公園内の県立図書館では文学書を好んで読んだ。安倍能成著「青丘雑記」の“浅川巧さんを惜しむ”を読み、露堂堂と生きた巧さんを知り慕った。平野政吉県立美術館では藤田嗣治の作品「秋田の四季」を馴染みになる程、通い鑑賞した。



生涯の愛書となった「青丘雑記」

生保内の自宅裏で作品「秋のスケッチ」と共に

クラスメートと千秋公園にて

コミュニケーション－7　HA1958　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

1960 年　20 歳

川口市領家に住んでいた家の裏に入野鋳工所があった。その鋳物工場で京都大学の哲学科を出た青年が鋳物の材料になる鋳鉄をハンマーで割る仕事をしていた。俳優よりも美男子で鍛えられた肉体が逞しい人であった。入野鋳工所に母のヤミ米を納めていたことで、その青年と親しくなった。

休みの日には彼の部屋に呼ばれ哲学や心理学、和洋の文学について彼の蔵書から様々な本を借り、読むようになった。西田哲学、カント、フロイト、カフカなどについて見識を得て感化されることが多かった。身体を作ること、鍛えることが哲学の基本だと言った。労働は修行であり、労働から日々学んでいると語る彼に私は憧れを抱いた。

ある時、「日活で津川雅彦が『月下の若武者』という映画でデビューするが、その脇役 2 人を募集している。推薦するから応募しては。」と言われた。若気の至りからその気になり、その時に撮った写真の中の 1 枚である。しかし応募した郵便物は料金不足で雨の日、哀れにも濡れた状態で返送されて来た。その無残さに思い上がった熱が一気に冷め、我に返り応募を諦めた。デビュー後の津川雅彦が名優になっていくことが嬉しく励みにして、生涯のファンとなった。

大泉鋳物工場が並び見える芝川の領家の自宅前にて

自宅前の荒川堤にて

コミュニケーション−8　HA1960　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

1963 年　23 歳

1963 年、川口市青木公民館での結婚式では 350 名もの来賓の方が祝ってくれた。妻・昌子とはお見合い結婚である。

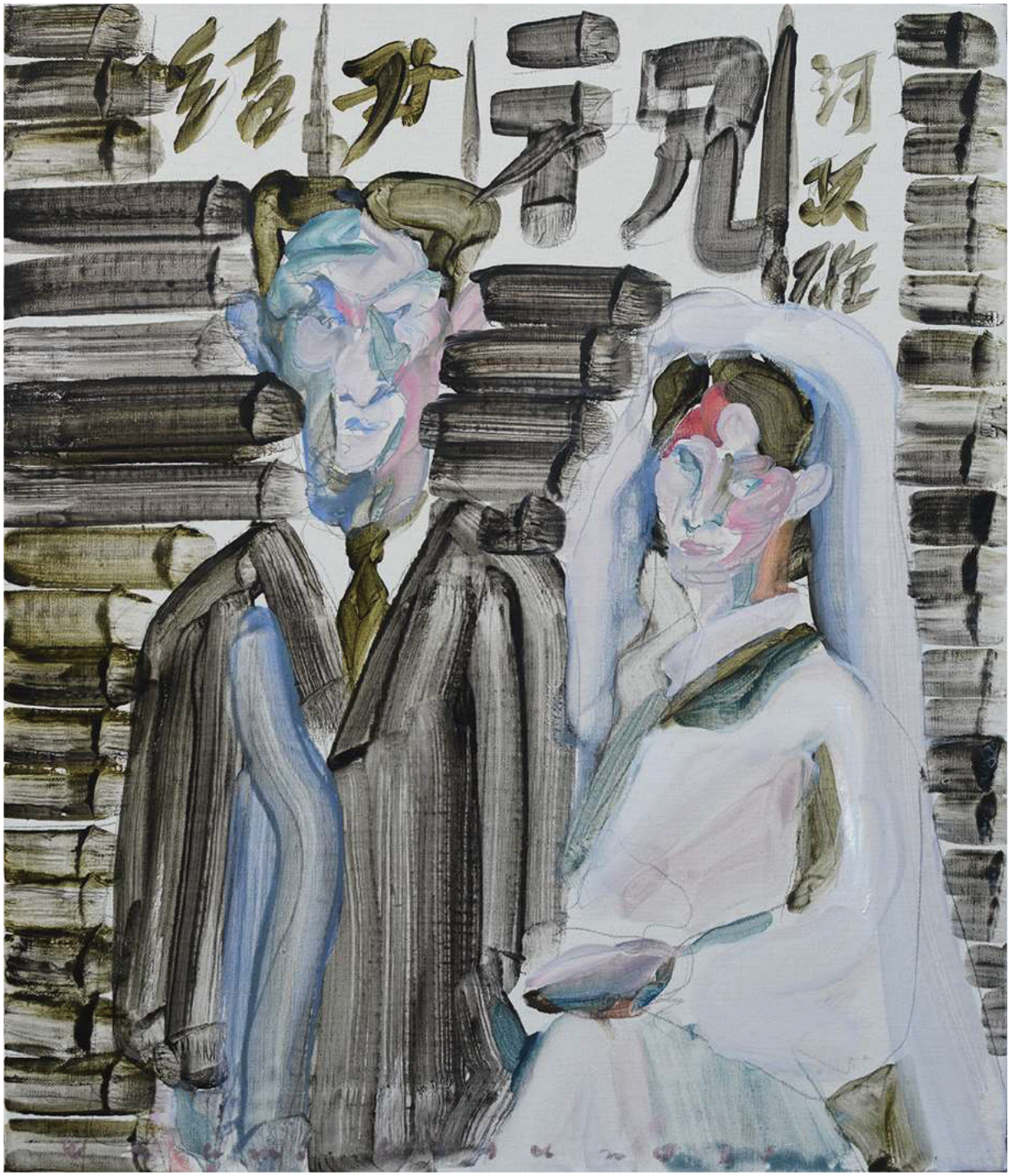
彼女のしとやかさと可愛さから 1 週間で結婚したいと仲人に返事をした。式を挙げるまでは多事あったが、生活上の経済への不安は未決のままであった。

新婚旅行から帰って、心配していた結婚式の収支は黒字に収まり、現金が 27 万円も残されていた。同胞達や知人等による義援金のようにも思える新生活の船出であった。

新居は川口市領家の荒川沿いにマッチ箱のような 30 万円程の建売住宅を買った。母が 10 万円を出してくれ、青森八戸市に住む父方の親族から 10 万円を借金した。残金は母のヤミ米による代物弁済の支払いで収得した。

八戸市の親族からの借金を 3 年後に返済しに行った。「お祝いで上げたつもりでいたので返済しなくても良かったのに。」と話され「これまで多くの人にお金を貸したが、返しに来たのはお前が初めてだ。」と褒められた。親族に認められたことが何よりも嬉しかった。

青木公民館前で親族等と共に



コミュニケーション−9　HA1963　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

1963年　23歳

1963年、当時珍しかった1週間もの国内新婚旅行をした。会津磐梯朝日国立公園を巡った山上の展望台(写真左)からの景観は里は秋たけなわ、山は冬近しの北国の景観であった。

高校卒業後、もう2度と秋田には帰る事はないだろうと思っていたが、育った故郷秋田の田沢湖、角館が懐かしくて東北旅行を計画した。

十和田湖は和井内貞行の「われ幻の魚見たり」の映画の感動と、高校1年生の旅行での絶景に感動した余韻、高村光太郎のブロンズ像「乙女の像」の素晴らしさを共感したかったからだ。会津の歴史には「恨」の朝鮮民族の情感に似たものを感じ、共感する感情を通い合わせた。

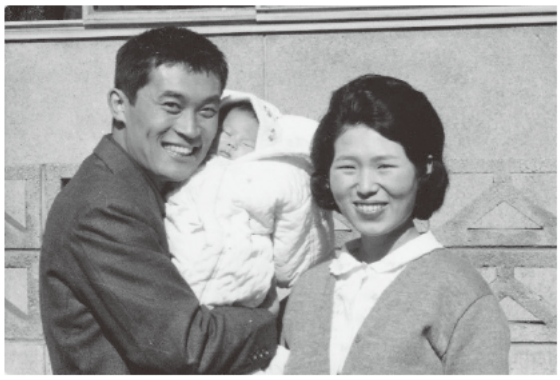
晴天の全日程を、色彩鮮やかな紅葉が飾り、夢のような好日を過ごした喜びは折々の語り草である。

十和田湖畔の「乙女の像」の前で

十和田湖畔発荷峠にて

コミュニケーション－10　HA1963　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

1964 年　24 歳



東京オリンピックの開幕式は 1964 年 10 月 10 日であった。その開幕式のチケットを入手していたのだが、10 月 7 日に長女が誕生したことでキャンセルせざるを得なかった。玉のような、絹のような肌触りの我が子を抱いたら、オリンピックへの想いはどこかへ消し飛んでしまったからだ。

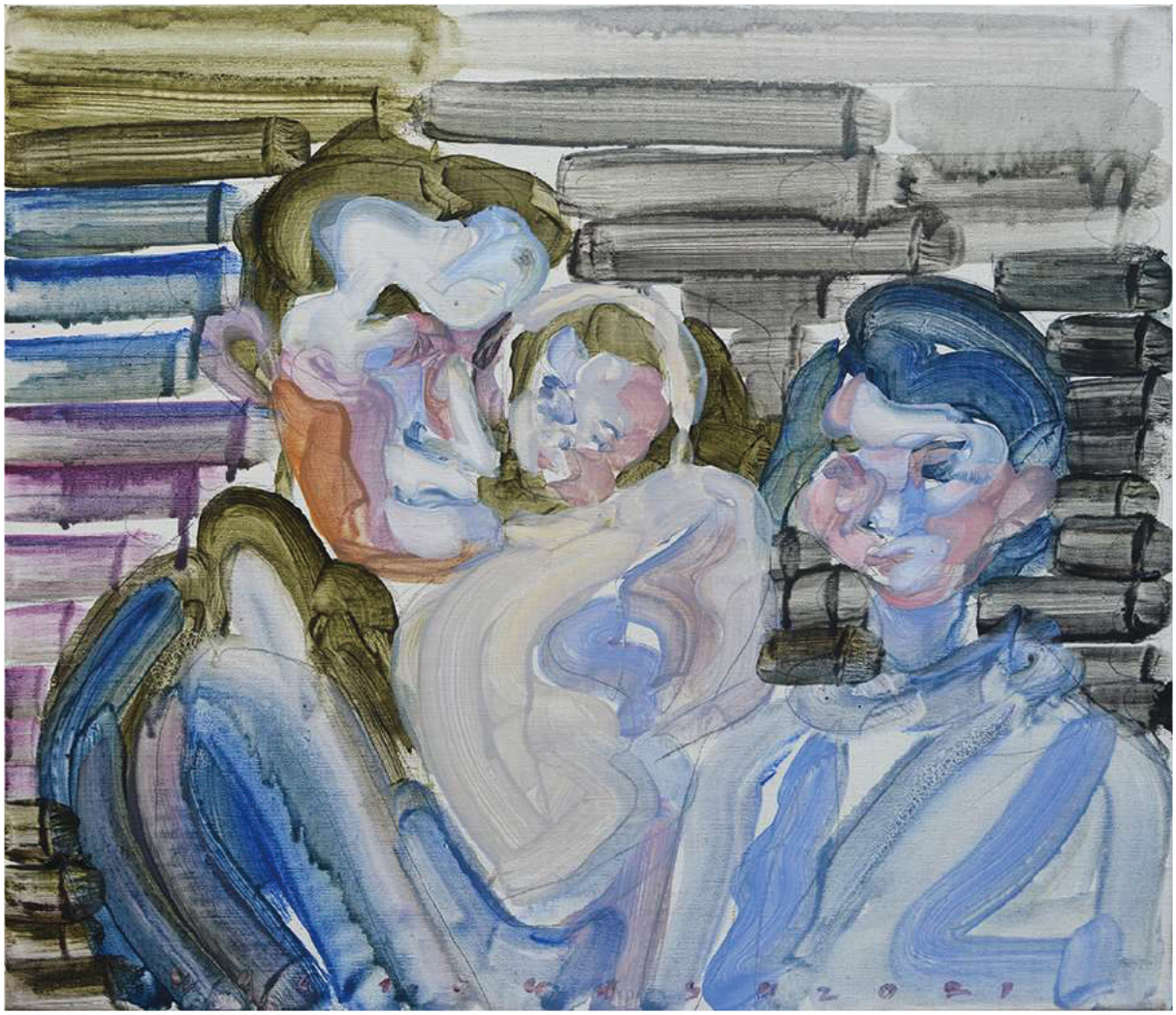
余りの可愛さに頬ずりをし続けていたら「貴方の髭の擦れで肌が赤く爛れてしまうからいい加減にして下さい。」と妻にひどく怒られてしまった。

時はたって、1988 年開催のソウルオリンピック開幕式には、韓国政府から招待を受けて妻と共に出席した。東京オリンピックの年に生まれた長女と、その後に生まれた長男と共に祖国の晴れの舞台を観ること出来、誇らしさで矜持を高めた。

4 年毎に開催されるスポーツの祭典オリンピックは我が子らの成長と共に人生の節目で国際平和の尊さを教えてくれる。

長女 裕妙　長男 智樹　88 ソウルオリンピック公園にて

88 ソウルオリンピック開会式にて



コミュニケーション－11　HA1964　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

1966 年　26 歳

1964 年は東京オリンピックが開催された。その年に河本電機商事を創業した。

1963 年に妻の尹昌子と結婚し、新婚生活の電化製品を近所の本田電機から現金で購入した。その時、本田さんが「月賦契約にしてくれないか」と言って印鑑を貸してくれと言った。

「月賦代金は自分たちが払うから」という約束だったので信用した。すぐに月賦の督促状が届いた為に本田さんを問い詰めると「この本田電機の名義上の社長になってくれれば会社を再建させ、迷惑をかけた月賦代金を支払うから」というので任せた。私の名義を使い電機製品を仕入れ、その代金を未払いした為に、問屋から私に支払い催促が来た。2 度も騙され月賦と仕入れ代金の 270 万円の負債を負う事となってしまった。

負債返済の為に本田電機を譲り受け、何の経験もなしに電機店を営むことになった。間抜けな話ではあった。その負債は 6 ヶ月で完済出来た。東京オリンピックのカラーテレビブームに運良く乗れたおかげである。月賦販売でカラーテレビを買い易くして多売したことが大当たりしたのだ。

妻には経験のない電機店を守る苦労をかけたが、立派に子を育て内助の功を果たしてくれた。借財を返し信用に応える試練を与えてくれた天と、助けてくれた多くの方々のおかげと感謝するのみである。

店を守った妻尹昌子

支えてくれた「河本電機友の会」の皆さんと観光旅行

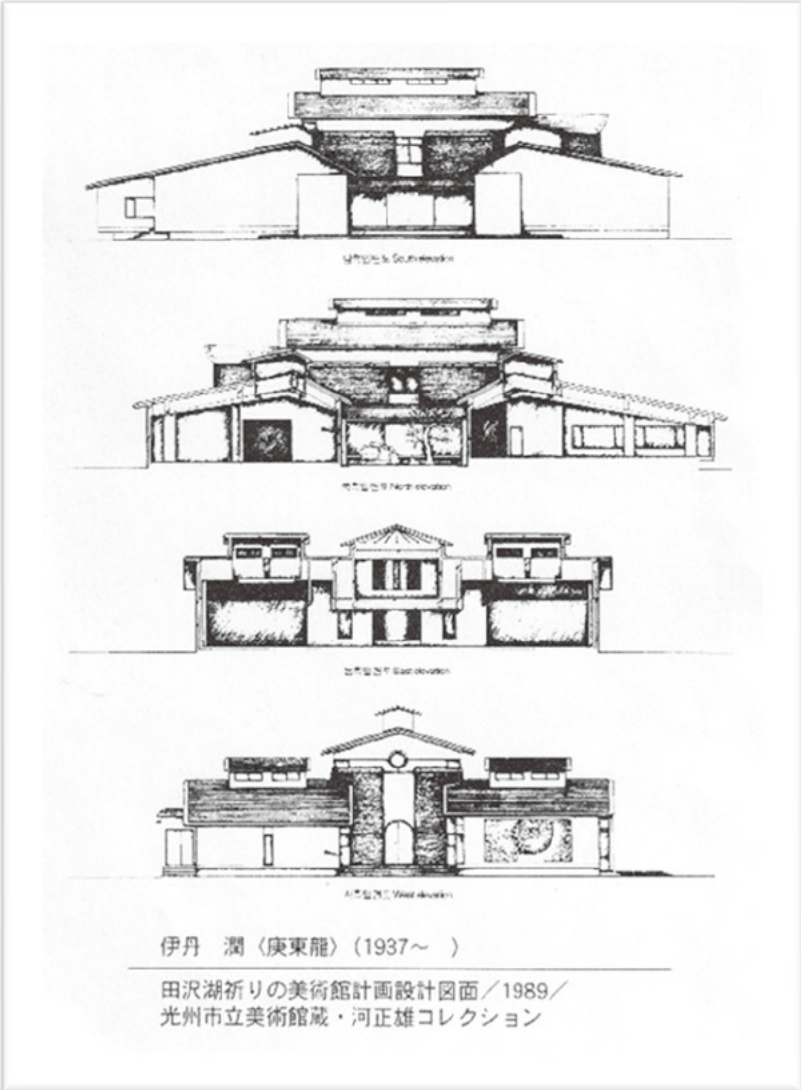
コミュニケーション－12　HA1966　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021 年作

1987 年　47 歳

田沢湖畔に「田沢湖祈りの美術館」を建てる為の敷地を捜していた。1980 年代、生保内中学校の後輩が経営する湖畔のホテルの隣地を仲介してくれた。

それまで田沢湖町からの紹介で候補地を見て歩いたが満足するものはなかった。その土地を見て心を決め、その夜はホテルのラウンジで友人らと宴を開いた。踊りは全く出来なかったがチークダンスくらいならと酒に酔った勢いで上機嫌に踊った。妻はぎこちなさに呆れていたようではあるが。

1990 年代になって、無念にもこの美術館計画は取り止めになり、この夜の宴は一夜限りの夢となった。



伊丹潤の「田沢湖祈りの美術館」設計図

コミュニケーション－13　HA1987　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021 年作

1988 年　48 歳

畏友・西木正明（第 99 回直木賞作家）氏の西木村名誉村民賞を祝う、彼の郷里でのツーショットである。

東京会館での直木賞受賞を終え、帝国ホテルでのレセプションに向かうことになった。文芸春秋社の黒塗り高級車が東京会館の車寄せに着いた。その車に、彼の父母や奥様が同乗すると思いきや、彼は私を呼び入れて同乗させた。突然の申し出に戸惑っていた私に「この席は君に座って貰いたいのだ。」と彼は言った。出迎えの為に同乗していた文芸春秋社社長は車中で「河本！」「正明！」と親しげに呼び合う私達の姿を見て「羨ましい。私はつい最近からのお付き合いで『西木先生』としか呼べない間柄ですから。」と 2 人の仲を喜んでくれた。

「人生の成功は友達である。社会に出たら心を開き許せる友を作りなさい。光を当てると光は帰って来る」と諭してくれた生保内中学校時代の担任・松本正典先生の教えがその時、鮮やかに思い出され天啓のように響いた。

我が家を訪問した西木正明先生の家族と共に

東京会館での直木賞受賞式にて

コミュニケーション－14　HA1988　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

1995 年　55 歳

1995 年 8 月 15 日、趙淳ソウル市長からソウル名誉市民章を受けた。祖国解放光復 50 周年を記念する式典での海外同胞に対する顕彰である。

前日、金浦空港から会場に向かうタクシーでかかっていたラジオが、その日の祝賀行事についてニュースを流していた。私の名がアナウンスされ感激で身体が熱くなった。

歴史的国家行事で「これは大変なことになったぞ」と気持ちを引き締めた。自宅に前触れもなく招請状が届き、行事の内容については詳細を理解していなかった為である。

8 月 15 日の重要イベントは光化門前における政府行事で、金泳三大統領が植民地時代の旧総督府尖塔撤去を宣言され、その遺物を取り壊した。負の遺産とはいえ歴史が消えて行く事に疑問を抱き、惜しまれてならなかった。

我々はなくしてはならない、忘れてはならない歴史的文化遺産を失って来たからだ。この記録は呉徳洙監督の映画「在日」に収録されている。

尖塔撤去の瞬間

式典を終えた金泳三大統領

尖塔撤去セレモニー会場にて

コミュニケーション－15　HA1995　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021 年作

1995 年　55 歳

1995 年 9 月 20 日、第 1 回光州ビエンナーレの開幕式の時に初孫の智香が誕生した報せを受け二重の喜びを感じた。

我が子 3 人の誕生も、それぞれの喜びの中で育て上げた。そして 3 人の孫は早や大学を卒業して社会人となり、私も老境を迎えた。その月日の流れの速さに驚くばかりである。

私には 4 人の妹弟がいる。父母の労役を手伝い、家に残された妹弟の面倒を私が見た。小学 5 年生の時は背に私の弟、両手に妹弟の手を握って通学した。その時に兄ではなく父母の感情が育っていたのだろう。

妹弟の成長過程は恵まれず、ふくよかではなかったが、父母の分まで兄として愛情を注いだつもりだ。そんな環境が子や孫に対する愛情を育てたものと思う。

成長した子と孫３人との還暦祝（1999 年 11 月）

コミュニケーション－16　HA1995　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

2003 年　63 歳

2003 年 7 月 21 日、韓国光州市の朝鮮大学校から名誉美術博士の学位を受けた。その 4、5 年前から大学側より打診は受けていたのだが、受諾に躊躇していた。

理由は高校卒の学歴であることの気後れと、民族教育も受けず韓国語も十分に習得していない在日の劣等感からであった。家庭が貧しくて 4 人もの妹弟がいた為、進学は考えられなかった。中学を卒業したら父母を助け手伝う予定が、恩師の中島先生の励ましで急転し高校に通うことが出来た。その時、母は大学まで出すのだと言って懸命に働いていたが、大学などは夢のまた夢で考えられなかった。

社会が大学だと思えば良い。社会から学べば良い。死ぬ日まで働き、学んで最後に社会から卒業証書をもらえば良いのだと私は父母に感謝した。

その話を知り、「父母の夢と願いを叶えてあげなさい、親孝行のつもりで受諾を。」と大学側が私を説得したのだ。

父は 1975 年に他界し、母は杖を使わねば歩行が難しくなっていた。車椅子で授与席に参席し、共に喜びの涙を流してくれた。

2011 年、「正雄、大学に行かせられなくてごめんね。」と幾度も言って母は亡くなった。

学位授与式で総長の祝辞と学位を受ける（2003 年 7 月 21 日）

学位授与式参列の母と家族と共に（2003 年 7 月 21 日）

コミュニケーション－17　HA2003　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

2011 年　71 歳

鎌倉宮近くの李禹煥先生宅に、光州市立美術館主催の李禹煥展の計画を知らせ、展覧会に不足している作品コレクションを依頼する為に伺った。

1980 年 12 月に発刊された美術雑誌「みずゑ」の李禹煥特集を書店で見つけ、版元から在庫を買い求めたのが縁の始まりである。2 年後に李禹煥先生から「“みずゑ”があったら 10 冊程分けてくれないか？」と連絡があり、20 冊ばかり送った。

その４年後に偶然、東京で初めてお会いした際に「ヨーロッパで美術展の計画があるのだが支援して欲しい。」と請われたので支援する事となった。ヨーロッパ展を支援する為に鎌倉の丘に上にあった先生のアトリエを訪問した。その時は奥様が内助の功を尽くされ、画業を支えていたことに心打たれ忘れられない。その際にコレクションした作品は河正雄コレクションの華であり宝になった。

活躍された李禹煥先生は世界に名を轟かせることとなったのだが、李禹煥先生の美術世界はベルサイユ、グッゲンハイムへと広がり世界に咲く大輪の華となって咲いている。

光州市立美術館での河正雄コレクション李禹煥展の先生（中）と姜震太光州広域市長（左）（2017 年 3 月 3 日）

鎌倉の李禹煥先生宅でのご夫妻（2016 年）

コミュニケーション－18　HA2011　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

2020年　81歳

この家は埼玉セマウル美術会のアトリエとして建てたもので、改築し自宅にして住むようになった。それまでは韓国民団川口支部のホールで写生会を開いていた。
会の活動が広がり、全国に報道されるようになり、その事を疎ましく思う団員達から弾劾を受けた。拠り所なく、それならばと建築して会を存続した家である。
それから10年後の話である。赤羽から池袋に向かう電車の中で「河先生！」と肩を叩かれた。赤ん坊をおんぶしている女性で、すぐには誰か判り兼ねていた。「美術会ではお世話になりました。芸大を出て中学の先生になり、結婚して赤ちゃんも出来ました。」と話された。セマウル美術会にお母さんと弟と一緒に学びに来ていた娘さんであった。
その後、彼女とは一度も会っていない。皆が大きくなって立派にやっているだろうか、セマウル美術会の事を思い出すのだろうかと、考えるだけでも当時の苦労が消えて何とも幸せな気持ちになる。
「昔植えた苗木、大きく育つ。今植える苗木、後の大木」の境地である。

千葉市美術館でのアーティスト江上越との出会い（2020年12月8日）

コミュニケーション－19　HA2020　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

2020年　81歳

2020年12月18日、「河さんへのインタビューをしたいので来週訪問したい。河さんの人生を聴いて素晴らしい作品が作れるような気がします。自分の芸術、生涯の中で重要なステップになると信じています。」とFAXが届き、数日後に来宅された。

「河さんのアルバムを見たいです。」と請われたので学生時代や家族の写真帖を数冊出したところ、スマートフォンで写真を撮りつつ「これはいつ頃の写真で、その思い出やエピソードを教えて下さい。」と言いながら素早く記録する姿に息を呑んだ。

何を記録しているのか、自分が何を語ったのか頭に残らぬ程のスピードで、私は全神経を傾け準備された質問に精一杯に対応した。

「私はあなたのこれまでの制作経験から、誤解によるコミュニケーションの本質を追求する作品を作っている事に関心を持った。制作に役立つ事なのか判らないが……。」と話を始めた。

「私の人生は人からの妬みや嫉み、社会からの差別、蔑視、偏見、友人からの背信や詐欺、国や組織からの阻害、弾劾など心休まる暇のない道を歩いた。ありとあらゆる事柄で無理解と障害が立ち塞がり、物事が真っ直ぐに進んだ試しがなかった。人の世は全て損得と謀で生きるのかと承知はしていたが、自分は善悪両面を併せ持つ人にはならないように生きようと頑張って来た。文化の違い、民族の違い、習慣の違い、境涯の違い、時代の違い、年代の違い、老若男女の違い、先輩と後輩の違い、この世は価値観の違いだらけの齟齬（そご）の世界なのだ。この違いだらけの世界の中を“自分らしく”どう生きるかである。」と処世観を実直に述べた。

千葉市美術館での江上越作品と共に（2020年12月8日）

コミュニケーション－20　HA2020　53.0cm×45.5cm　油彩　キャンバス　2021年作

千葉成夫（江上越）

心の皺－江上越による河正雄

美術評論家
千葉成夫

（1）肖像表現

現代以前、つまり写実主義が生きていた時代なら、肖像画とは兎にも角にも「眼に見えるその通り」に描く、つまり現実を再現するものだった。依頼主なり観客も、とにかく「似ている」ものであれば（例えば高齢で容貌が崩れつつあるような場合なら多少の手加減はしたかもしれない）、それでよかった。それゆえ、写真登場以降の現代では肖像画は存在しえない、とも言い得る。江上越にとってそれは常識である。

江上越にとって「肖像画」による探求は初めてではない。もうかなり長く人の顔を描いてきている。ただ、今回のような、（基本的には）一人の人物を数多く描くのは新たな試みである。しかも都合があって短期間に複数制作しなければならなかった。彼女は努力して 20 点を制作した。ただし、彼女にとって一貫している「コミュニケーション／ディス・コミュニケーション」というテーマが変わったわけではない。このシリーズはきわめて特異なものとなった。

（2）稀有な提案

この制作を考え、彼女に依頼したのは河正雄である。彼は美術にたいする広く深い理解があり、自分の肖像画が写実主義的なものにはならないことを承知のうえでこの企画を考え、彼女に依頼した。つまり彼は、自身の顔を写真のように描いてもらいたいわけではなかった。はじめから様式なり表現方法は作家に任せていた。この若き美術家は、北京で学んだ時に、同じ漢字を使いながら意味が違うことから生じる「行き違い」体験について考えていくなかで、自身の作品の「主題」を見出してきた。以来、主題は一貫している。河正雄は、自身と在日が関してきた体験を、肖像画という形式のなかでどように表現してくれるのだろうか？　そういう関心と期待を抱いていたにちがいない。

この提案じたいが稀有である。そのキッカケを作ったのが僕だったから言うのではない。河正雄という並外れた人物の大きな度量ゆえに生まれ、そして実現した提案なのである。

そうはいっても江上越が引き受けなければ、これは実現しなかった。しかし、彼女もまた、時代と環境は異なるけれど、漢字を共有する中国への留学時にさまざまなコミュニケーション・ギャップに遭遇し、苦労し、悩み、それを自身の表現の主題にすることになった。その点で、河正雄に共感するところが少なくなかったに違いない。いわば人生の「主題」は両者に共通していた。たんに共通しているというのではなく、彼女もまた類似の状況のなかで生まれて生きてきたと言い得る。「コミュニケーション／ディス・コミュニケーション」という主題は、彼女にとっては自身の生活のなかで蓄積されてきた現実と重なるところがある。それが、彼女のこれまでの肖像画

の場合とは少し、あるいはかなり異なる点である。

彼女は彼に、まず沢山の写真を見せてくれるように頼み、それをもとに、彼の話に耳を傾け、ときおり質問を投げかけ、絶えずメモを取る。それらをもとにして、彼女はこの 20 点のシリーズの絵画を描いた。

（3）絵画の構造

彼女は「肖像画」シリーズをずっと続けてきているのだが、最近の個展「君の名は」（2019 年 11 月）で一つのかなり明快な方向性を示した。それは、肖像画という本来なら具象性が不可欠な絵画のなかにいわばある種の抽象的な構造を作り上げようとする試みということである。

具象（現実再現）という描法は賞味期限がとっくに切れているから問題外だが、彼女は一方では「具象（現実再現）」という意味ではない、人物の「具体性」をなんとか表現したいと考えている。同時に、他方ではその「具体性」を絵画の構造じたいと重ね合わせてみたいと思っている。そうしないと、現代では絵画たりえない現実がよく解っている。ちょっと言い方が難しいかもしれないので少し砕いてみるが、人物そのものを彷彿とさせながら、かつ「具象（現実再現）」にならないように描いてみたい、ということなのだ。「外見」だけ似せても、というより「外見」だけ似せることは、結局それだけに留まってしまって、その先へまでは進まない。20 世紀に明瞭になった写実主義の終焉がそのことを証明している。

いま求められているのは、外見ではない人物の「具体性」の表現にほかならない。それが可能になるためには、肖像画がまず絵画として（写真や似顔絵やイラストやマンガではなく）ちゃんと成り立つ構造が不可欠である。彼女が色彩を最低でも虹の七色、あるいはそれ以上にするのも、基本の「線」を一見抽象的に見えるヨコやタテのストライプにするのも、そこに絵画が絵画として成り立つために最低限必要な「構造」を生み出すためにほかならない。その先は、彼女にとって（も）未知数といっていい。今度の連作で彼女はそのことに挑んだ。

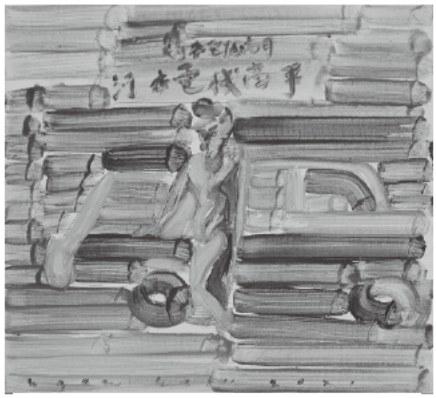


図1　《コミュニケーション－12　HA1966》

（4）星と惑星

この 20 点を通覧すると、提供された写真アルバムのなかから選んだ写真を元にしながら、河正雄の生涯を辿っていること、そのために時に家族が登場すること、その「家族の登場」はしかし「肖像」が目的ではなくて家族間の「親和」、言い換えるなら「コミュニケーション」を描いていることが解る。そしてさらに、家族以外で顔が正面から描かれているのは極めて関わりの深かった友人（西木正明）ないし知人（李禹煥）に限られていることが解る。そして、それ以外では締め括りとして江上越とのツーショットがあるだけであることが解る。この 20 点目は一種の「署名」とみなしてもいいだろう。それらはすべて、「具体性」の表現のための試みでもあり、同時にそこに「構造」を実現するための試みでもある。

図 2　《コミュニケーション－15　HA1995》

全体を見終わると、おそらく河正雄の生涯のことを知らない人々でも、彼がどういう生涯を過ごしてきた人間なのかが、おぼろげながらでも解るだろう。感じられるだろう。具体的に解るというのではないにしても、彼の心と魂と願いとが、いうならばそれそのものとして、一つの構造を成している空間、つまり絵画空間のなかに表現されていることが、見る人には伝わってくる。江上越が「河正雄」に見たものが、伝わってくるのである。

興味深いことがある。この 20 点では、河正雄の顔（と姿）だけ描いたものが 8 点と、ほぼ全体の半数に近い。そのうちの 6 点は顔と姿だけで画面いっぱいである。それ以外の 12 点は家族と一緒か、友人・知人と一緒か、（いわば）仕事と一緒か（2 点＝《コミュニケーション－12　HA1966》と《コミュニケーション－15　HA1995》）か、である。このように二つに大別してみてだいたい

半々になったことじたいは偶然かもしれない。偶然だろうけれど、僕には、画家の関心の中心はやはり「河正雄その人」であり、同時に「コミュニケーション／ディス・コミュニケーション」でもあることの現れだと見える。当然である。人は個であり、かつ個ではないからだ。画家は、彼女は、対象ないし主題の核心をこそ掴もうとする。中心の星を描き、そしてその周囲に惑星を散りばめる。

（5）眼は心の窓

ここでは前者の8点、つまり「星々」について見ていきたい。

「星」の最初の 6 点は幼児期から青年期への成長を辿るかのようだ。後の2点は60歳代と80歳代のものである。この8点を繰り返し見てみる。もちろん脳裏には他の12点に描かれた河正雄の「顔」が絶えず去来している。

モデルがきわめて旨く捉えられていることに、僕はまず驚く。現実再現に似ているという意味ではない。その「人となり」の枢要なところ、その肝心なところがかなり的確に掴まえられていると見える。画家はきっと直感的に描いているにすぎないのだが、その結果に僕は舌を巻く思いがする。

人の顔は嘘をつけない。どんなに顔面全体を総動員しても、「眼（まなざし）」だけは偽ることができずに本当のことを語ってしまうものである。そのことを知ってか知らずか、この画家は8点のすべてで「眼（まなざし）」を直接的に描くことを避けている。いや、「コミュニケーション／ディス・コミュニケーション」を主題にしてきた画家には、これは失礼な言い方というものだろう。画家はちゃんと解っていて、「眼（まなざし）」そのものの描写を避け、顔を全体として描くことに集中したにちがいない。

その結果、ここでは「心の窓」が開かれている。このシリーズが「肖像表現」として成功しているいちばん大きな理由はそこにある。

もちろん、描き方のことも言っておかなければなるまい。ほとんどの絵で背景は横のストライプだが、それは抽象的で機械的なストライプではなく、少し丸みを帯びたストローク（筆触）であり、色彩も一色ではない。そればかりでなく、そのストロークはしばしば人物の衣服、また顔そのものをさえ構成する要素になっている。つまり画面全体がこのストロークで成っているとさえ言い得る。それにも拘わらず、あるいはそれだからこそ、画家の作品は現実再現性を免れながら「具体性」を獲得している。この「具体性」、あるいは「現実性」こそが、「眼（まなざし）」が描かれていない肖像に「口ほどにも」ものを言わせている。

図 3　《コミュニケーション－1　HA1940》

図 4　《コミュニケーション－3　HA1949》

図 5　《コミュニケーション－4　HA1954》

（6）嵐と衝動の時期

1歳の子は口もとと顔全体にある意志の強さを感じさせる。それと同時に、身体全体の表現は未だ環境のなかにたゆたっていることを示している（《コミュニケーション－1　HA1940》）。だが9歳になると、この少年は眼もとと口もとに聡明さと意志の強さを明確に示しており、同時に顔の全体にはある種の哀しみの影がすでに現れている、そんな強い感触を漂わせるように表現になっている（《コミュニケーション－3　HA1949》）。

この感触は14歳になるともっとずっとはっきりして（《コミュニケーション－4　HA1954》）、とくに右目の、口もとから左の鼻梁にかけて、現れてくる。世界は自分にとって決して宥和的ではないことがこの青年の身体の深くまで浸透している（《コミュニケーション－4　HA1954》）。

しかし、彼はもちろん負けることはなく、強く前に進んでいこうとしている。

とはいえ多感な青春時代にはいろいろな事が起こるから、青年のなかでは希望と不安と喜びと苦難とが交錯する。そして底には常に「在日」の影がさしていて、冬のような厳しさを避けられない（《コミュニケーション－7 HA1958》）。

それでも、青年河正雄は良き伴侶に恵まれ、子供達も授かり、苦労は伴ったとはいえ、事業にも成功してゆく。それに伴って生活と心にゆとりが生まれていくことになる。

図 6　《コミュニケーション－7　HA1958》

（7）心の皺

そして、肖像画 8 点の最近の 2 点である。そのために江上が選んだ写真は 2003 年と 2020 年のもので、少し時間差がある。前者は韓国光州の朝鮮大学校から美術博士の学位を贈られた時のものであり、後者は昨年の、自宅でのものである。江上が河正雄に初めて会ったのは 2020 年 12 月だから、8 点目は（それだけが）本人を知ってからの作品ということになるだろう。この 2 点は、前の 6 点のうちの最後のものと同じように、「顔」が画面全体を覆いつくしている点が特徴であり、印象的である。

そこに描かれている「顔」は、表面的には、年月を経て酸いも甘いも噛み分けた、そういう「顔」である。だが、どう言えばいいか、この人物の顔は生まれた時からずっと変わらないものを宿している。というかそれが、この「顔」の表面ではなくて「なかみ」を形作っている。

画家はそこまで表現し得ていると、僕には見える。この画家はまだ若いのだが、それでも、「コミュニケーション／ディス・コミュニケーション」を一貫して追い続けてくるうちに、この問題についての彼女の感覚はかなり研ぎ澄まされてきているのだ。表面ではなくなかみ－画家の眼はそういう「もの」、そういう「こと」を感得し、描き出す。上辺だけに流れる写実主義では出来ないことである。彼女は、このシリーズでは、自身の感覚が捉えた直感だけで描いていると言ってもいいだろう。その意味では彼女の絵はまだ成熟していないというか、まだ若々しいというべきだろう。それは美点である。この直感は何を語っているだろうか？

人はどんな時代に生きても、一人一人、それぞれ、さまざまな想いを心に刻んで生き、そして死んでゆく。心に刻まれた皺は、顔に影を、あるいは陰を、おとす。だが顔の実際の皺には身体と心に起こったさまざまな現象が間接的に（あるいは変形して）現れるので、心の皺をそのままあらわすものではない。喜怒哀楽は心のなかに入るとその形を変える。それに、「心」という、有るとも無いとも言い得るひとつの「ひろがり」は、一人の人間の身体に限定されていながら、同時にじつはそこに留まってもいない。まさしく他者達との「コミュニケーション／ディスコミュニケーション」の空間と時間にまで広がってもいるのである。この「有りながら無い」地平、「無いようで在る」地平が、心の皺の居場所であり、その在り方なのである。

河正雄の顔という対象（ふつうは「モチーフ」と呼ぶ）を前にして江上越の表現の試みがもたらしたのは、社会と世界のなかで生きてきた河正雄の心模様であり、心の在り様である。しかも「それ」が、写真や写実絵画などよりもずっと直接的に表現されている。僕にはそう見える。何故だろう？

泣いていたり笑っている人をそのまま描くよりも、眼に見える「こと」を、いわばいったん現実から解放する。喜怒哀楽の収まりどころを探す。だって、人は大泣きが収まると笑ったりもするし、大笑いが収まると渋面を浮かべたりもする。喜怒哀楽は必ずしも四つにはっきり分かれているわけではない。それらは繋がりながら分かれている。感情は、心は、海のような広がりを本質としているから、その「皺」は波のようなもので、波の形状は千差万別であり、かつ、収まれば一つの広がりなのである。

（8）表現の先へ

一人の在日として戦争末期から現在まで生き抜いてきた河正雄の生涯は差別、苦難、貧困、努力、達成、軋轢、葛藤、失敗、成功の生涯だったろう。子供の頃から絵を描くのが好きだった彼は、事情が許せば画家の道を歩んでいたかもしれない。それは断念せざるをえなかったのだが、それでも、彼は絵画・芸術にずっと関心を抱き続けた。

やがて努力と運にも助けられて余裕が出来ると、在日の状況そのものを何とかしたい、そのために何らかの貢献をしたいとの想いで、さまざまな活動を始める。美術作品の蒐集もその一環である。まず在日の美術家達を援助するためである。ついで、韓日間の歴史の正しい相互理解の促進のためであり（美術作品は時に歴史の証言者の役割も果たしうる）、それを通して相互の文化交流に寄与するためである。さらに、多くの人々が美術作品に触れる機会を生み出すためである（美術館のみならず学校や福祉施設への寄贈など）。

もともと絵が好きな彼にとって、美術作品蒐集とはそれをステイタスとして誇るためでは全くない。蒐集した美術作品（だけではないが）のほとんど全てを、彼は韓日の然るべき施設・機関・場所に寄付してきていることは周知の通りである。それは、つまるところ韓日の間の相互理解と宥和と親交を促進させたいという願いから以外ではなく、引いては世界の平和と安寧を願ってである。その努力は途切れることなく現在まで続いていることも周知のことである。

江上越は、そういう稀有な人物の「肖像表現」に挑んだ。その成果として、まったく説明的ではない、ありきたりの肖像画を超える、特異な「肖像表現」が生まれている。

そこには人間味溢れる一人の人物がいる。絵画表現以外ではおそらく不可能な、しかし通常の写実表現では不可能な、ひとつの「肖像表現」が成された。

絵の講評のように言うなら、彼女の肖像画は、地をなす横（ないし縦）のストライプのストローク（地）と、画面のほぼ全体を占める顔（図）とから成る。前者は整然と真っすぐだが、後者は、基本は前者と同じストロークなのだが、長さは短く、しかも曲がりくねっている。そうした、絵画構成というより（繰り返すが）「構造」の実現の努力によって、「地」と「図」が繋がりながら繋がっていないという緊張関係をそこに生み出している。そんなふうに言うことができる。この緊張関係が、僕が言うこのシリーズの「構造」の中核になっているのだ。例えば16世紀のジウゼッペ・アルチンボルドは春夏秋冬や地水火風などのアレゴリーのために人の顔を用いたに過ぎないから人の顔が描かれているわけではなく、背景は常に暗転である。つまりそこに空間の「構造」は無い。しかし江上越は河正雄の顔を描いているのだ。しかも、その表現からは不思議なことにモデルの人間味が流露している。

人はいつも緊張関係のなかに置かれて生きるほかはない。喜怒哀楽は、とくに「怒哀」や「寂漠」や「悲傷」などの方はすべて個たる人間が、人が個として、引き受けざるをえない。世の中はそう出来てしまっている。江上越が描き出しているのはそれをまともに引き受けて生きてきた人の顔の表現なのだ。しかもそれは、「顔」を「地」と「図」の関係のなかに置くことによってなのである。そこに彼女のこの肖像表現の特質がある。この「関係」を、例えば「社会」と「個人」とのそれというように読み換えてもいい。それは観客の自由である。

人が生きていくことの底に流れている無常観、そう言うとありきたりかもしれないが、そういう「感触」までをも彼女は表現しえている。年月を刻み込んだ人の顔は格別なものだが、絵画で、とりわけ近代絵画がもう終わっている現在では、それは容易なことではない。

絵画へ－江上越の展開

美術評論家
千葉成夫

文章を書くにあたって今回は実際の作品をまだ見ていない。かなり不安である。それでも、江上越に送ってもらった作品写真を手掛かりにして、また彼女と少しメールのやりとりをしながら、書いてみる。

今回は絵画作品が出品されるわけだが、思うに、《にじいろ》という作品名を持たない作品と、持つ作品とに、分けられるようである。彼女の作品をずっと見てくれば、いやそうでなくても普通に見れば、制作順としては《にじいろ》の方が後に来るものだろう。もちろん画家の制作は前後を行き来するのがふつうだ。でもこの場合は、全体として見れば《にじいろ》という作品名を持つものの方向へ向っている、ように見える。方向としては、である。

作品名が《にじいろ》ではないものと《にじいろ》である作品との違いは、前者では人の顔の部分（目、口、鼻など）が概してはっきり識別でき、後者ではそうではない、という点だ。後者にも顔のパーツは僅かとはいえ必ずある。あるにはあるのだけれど、虹のような横方向のストロークが画面全体を被い、観客はまず何よりもその「流れ」が生んでいる美しさに魅了される。これは重要な点だ。

人の視覚は形あるものに焦点を合わせる（見る）ことに慣れているから、絵を前にしても無意識のうちにも形を探す。つい、そうしてしまう。逆に、抽象絵画のように簡単に識別できる形がない場合は、一般の人々だとわけが解らないまま通り過ぎてしまうかもしれない。絵に関心がある人なら、あるいは捉われのない人なら、虹のようなストロークの流れの美しさに見とれて立ち止まる、かもしれない。絵画の鑑賞と理解は、そこから始まる。立ち止まって「これは何だろう」と自問する。

展覧会名は「君の名は？」である。人に呼び掛けている。それも一人の人に向ってである。個々の作品のタイトルが何であれ、一点一点がそれぞれその一人の人に向って呼び掛けている。江上越のこれまでの作品をいちおう知っていれば、人の顔を描いたいわば肖像作品群の延長上の試みだとわかる。それを知らなくても、「顔」の存在に気づいたところで《にじいろ》の方も良く見直してみれば、「顔」のパーツを識別することになるだろう。そして観客は理解の端緒に立つ。だが

それはどういう理解だろうか？

例えば僕の理解は次のようなものだ。どの作品にも顔の輪郭らしきものや顔のパーツらしきものを見てとることができるけれど、江上越の意図はいつも人とのコミュニケーションにある。君の名は？　君は誰？　まずこの主題のことを念頭に置く必要がある。

肖像の作品でもそれ以外の作品でも彼女のテーマは一貫してコミュニケーション（それが引き起こす正解・誤解・行き違い・齟齬など）にある。彼女の肖像の作品について前に書いた短い文章のなかでも触れたけれど、後ろ姿を描いた作品もある。後ろ姿のほうがその人となりを良く伝えることもあるのだ。それらの肖像作品は人の顔の似姿をベースにして描かれていた。個々の人の顔そのものにはそれなりに忠実で、しかしその人の本質だと彼女が考える点を強調した似姿だった。従来の言い方を使うならイリュージョニズムは踏まえたうえで描かれた作品だった。

それにたいして今度の作品は、それらの肖像作品の展開ではあるが、方法的にはイリュージョニズムから一歩、いや二歩も三歩も離れている。結果的にせよ離れている。そこに今度の作品の特徴、特質、魅力がある。

横方向のストロークも虹色のような多色も、おそらく直感的に選ばれているにちがいない。野暮を承知で解説すれば、横方向のストロークは、美的には絵画への意志によって、絵画構造の点からは時間性の導入の意図によって、選ばれている。この二つがあいまって作品に動き、画面上の造形的な流れの動きと、「君の名は？」という問いかけ（コミュニケーション）という時間の流れの暗示とを、もたらしている。その虹色の多色も、ストロークが一本ではなく何本かに分節されていることとあいまって、一方で絵画的な豊かさを、他方でコミュニケーションの複雑さを、問わず語りに示すことになっている。

「君の名は？」江上越個展会場（2019 年、白石画廊銀座新館）

視点をすこし変えてみよう。21 世紀に入った絵画がいま置かれている状況は、画家にとっては非常に辛いものである。西洋がルネサンス末期に生み出し確立してきた「近代絵画」は、その基本思想であるイリュージョニズムが 19 世紀いっぱいで崩壊し、アンチ・イリュージョニズムとして出発した抽象絵画（やミニマリズム絵画や概念芸術）も 20 世紀の後半には硬直化してしまった。その結果、近代絵画という一つの絵画は終り、僕たちは、いまなお（そしてこの先も長期間）、その終焉期のなかを歩むことを余儀なくされている。何らかの「主題」を表現しようというイリュージョニズムの様式も、そういうことを排除して絵画の造形性だけに的を絞った抽象絵画も、もはや（それだけでは）成り立たないことは明白なのだ。これが現代絵画の現実の姿である。

コミュニケーションという主題を江上越はいくつかの形式で追及してきたが、絵画作品という形式を採ると、いま言った問題に直面せざるをえない。以前の肖像作品は興味深いものだけれど、率直にいうが絵画のこの現況がちゃんと踏まえられていたかどうかは、少しあやしい。というか、彼女の作歴のなかでは本格的な絵画の最初の試みだったのだから、いわば出発のためのエスキースだったのだから、それは無理もない。

そして今度の作品がその展開である。以前の肖像作品から大きく動き出し、まだ少し躊躇いが

ちだとはいえ、現代絵画の根本問題はきちんと踏まえられていると、僕には見える。前から継続的に彼女の作品を見てきた一人としては、やっと、あるいはついに、絵画といういちばんキツイ形式、逃げ場がほとんないキツイ形式に（も）踏み込んだのかと、複雑な思いを抱く。だって、絵画こそいつだって美術の王道だし、絵画こそいまいちばん困難な形式だからである。勿論、それゆえ、複雑な思いを抱くと同時に、この踏み出しを歓迎もする。彼女のこの決断はむろん直感的なものだろうが、時宜を得てもいる。というのも、20 世紀後半の絵画にあっては絵画そのものという主題以外の主題はタブーのようにみなされてきたが、いま絵画はあらためて、この世界の現実と関わる主題を（も）求めている、そういう段階を迎えているようなのである。

こう言うと、すぐに、絵画への回帰とかイリュージョニズムの復権とか言い出す勘違いの人々もいるだろうが、どちらも論外である。イリュージョニズムを排除し、回帰ではない地平へと絵画を持っていかなければもはや絵画たりえないことは、すでに 20 世紀後半から自明なのである。

江上越の新作はその地平へと歩み出そうとしている。以前の肖像作品では彼女は描く対象の人物を知っていたから、「あなたはどういう人？」という問いかけがあった。既知の人物はほんとうはどういう人間か、その人と自分との関わり（コミュニケーション）はどういうものなのか、それが主題だった。

それにたいして、この展覧会名の「君の名は？」は特定の人物にたいするものではないように見える。ちょっと図式的な言い方になるけれど、作品名が《にじいろ》であってもそうでなくても、ここでの問いかけは必ずしも相手を特定してのものではなく、しかしその「人」からの返事は求める、そういうかたちを取っている。問いかけている相手は彼女の眼の前に居るわけではない。いや、眼の前に居るか居ないかは問題ではない。つまり、対象の人物の設定、「君の名は？」という問いかけ、それに対する返事、この一連の「出来事」は彼女自身のなかで始まり、彼女自身のなかで展開している。喩えとしていえば自問自答に似ているが、しかしコミュニケーションが主題なので、これまでの制作経験の蓄積を背景に、この自問自答は同時にいわば「自問他答」と「他問自答」を含んでいる。

それらを含んでいる限り、彼女のなかでのこの一連の「出来事」は自己完結で終ることなく、ある種の矛盾とか曖昧さを孕みながらも展開を続けていくだろう。別の言い方をするなら、正解・誤解・行き違い・齟齬が必然であるコミュニケーションという出来事を主題として、それを絵画以後の絵画として実現するための道を、彼女は歩き始めたのだ。

今度の作品に僕が感ずるのは、ひとことにまとめるなら、「エッセンス化、and／or、抽象化」、である（ご免なさい英語を使っちゃって）。一方で出来事のエッセンスを取り出し、他方で造形的には一種の抽象化の方法を援用する。この二つのことを同時に、同じ地平で、同じこととして絵画化しようという試みが、ここで始まっている。

今は昔、敗戦から 8 年くらい経った頃、この画廊に近い数寄屋橋で、戦争末期の東京大空襲の混乱のなか偶然に出会い、別れ、戦後になっても再会を果たせない男女の哀しい物語の唄が、この列島の巷に流れていた。いま、出会いも別れも再会も、そこには何故かいつもディス・コミュニケーションの影が差すなかで起こり、流れ、消えていく、そんな訳のわからない時代を迎えてしまっている。これはいったいどうしたことだろうか？　君の名は？

江上越の試み－顔が伝えるもの

美術評論家
千葉成夫

日本人美術家の江上越は「漢字」の発音が日本と中国とでは全く異なる意味になることに衝撃を受けて、美術家として出発したといっていいかもしれない。同じ漢字文化圏でも発音の違いが意味の違い、そして意思疎通の齟齬を生む。これは芸術の主題としては珍しいものではないが、江上越の試みが興味深いのは、この主題を一方で「誤解を生むゲーム」のかたちで作品化し、他方では人の顔を描く絵画を制作することで探求している点だ。つまり主題に対して、耳に入る「音」と眼に映ずる人の顔によって迫ろうと試みている。

ここで展示される作品は主に後者である。一見して、たんに顔のヴァリエーションを描いているのでもなければ、西洋のフォーヴィズムや表現主義由来の「デフォルメ」をやっているのでもないことが解る。どの顔も実物をデフォルメないし誇張していることは間違いないが、それは普通の意味での美的表現のためではない。

江上越の絵画は、いわば人の顔を写真に撮った場合と、自分がその顔から感じているものとの間の差異、誤差を計るためである。注意してほしいが、本物そっくりに描く代りに自分が感じているものをそのまま描いている、というのとはまったく違う。彼女が試みているのは両者の間の「差異」を描くことにほかならないからである。

人は顔にすべてが現れる、それは隠しようがない。それをふつうに現実再現的に描けば、「人となり」もそれなりに表現される。だが、それだけではもはや絵画とは言い難い。いま人の顔を絵画で描くなら、それとは違うことが求められる。これが彼女が選んだ方向である。彼女は、眼に見え、感じている顔にとどまらず、視覚と感覚のもっと奥にまで筆を進めようとする。こうして歪んだ顔、横を向いた顔、時には後ろ姿の顔（?!）まで描かれる。

友人を前にしてその顔を見る。顔は一人一人異なるから、よほど瓜二つでなければ、見間違えることはない。僕は彼とよく話もするから、彼のことが解っていると思っている。しかし僕の知らない時と所での彼の顔を、僕は知らない。

江上越の筆はいわばそういう「奥」まで描き出そうとしている。「ミス・コミュニケーション」を主題とすることは、「行き違い」を取上げて、それを表現するだけにとどまる筈がないのである。

江上越の「誤聴ゲーム」～一つの感覚ともう一つの感覚

美術評論家
千葉成夫

江上越が「言葉（言語）」の作品で試みているのは、正確にいうと「誤解」ではなく「誤聴」の問題だ。もちろん「誤聴」は「誤解」の元になりうるから、それを「誤解」一般にまで拡大しても構わないといえば構わないけれど、そうするとちょっと話がズレてくるような気がする。「誤解」というと、例えばアルベール・カミュの著名な戯曲作品『誤解（Le Malentendu）』のように深刻な場合もあるが、日常生活では同音異義語を使って、時には駄洒落なども交えて、会話に彩りを添えるというようなことだって普通にある。例えば日本語の「誤解」という単語を音だけ発音すると「五階」も「碁会」も「ゴカイ（沙蚕・Ragworm）」も「五戒」も意味しうる。

江上越自身が「mis-understanding」とか「mis-apprehension」ではなくて「mis-hearing」という語を用いていることに留意すべきである。つまり彼女は感覚（ここでは聴覚）のレヴェルでの「間違い」をテーマにしている。人の感覚はふつう「五感」といわれる。しかし、当然ながらそれ以外に少なくとも二つのもの、「触覚」よりもっと広範囲に及ぶ「身体感覚」と、広い意味での想像から生れる感覚、いわば「想像感覚」（予感とか妄想というようなものまで含めて）とを、付け加えるべきだと考える。それと、これも当然ながら、ここで「感覚」というのは脳に到達した段階までの物理的刺激のことではなく、それが脳による（総合的）判断となって行動、つまり「認識」となったものを指している。

そして、例えば主に聴覚を働かせているときでも他の感覚が徒に眠っているわけではない事実を忘れてはいけないと思うのだ。たとえ眼を瞑って音楽を聴いていても視覚以外は働いているのだから、聴覚は（視覚以外の）すべての感覚と共に働いている。絵を描いている場合も、視覚は他のすべての感覚と共に働いている。人間の「感覚」はいつも多かれ少なかれ綜合的なものなのだ。どうやら人間の脳はそのように出来ているらしい。しかも江上越がまず画家であることを、あるいは画家でもあることを、失念してはいけない。

つまり江上越の「言葉の誤聴」の試みは少なくとも視覚とは連動している筈である。彼女の「誤聴ゲーム」作品がほとんど、あるいはしばしばイメージ的なもの、そういう装置を伴う展示になっているのには理由がある。それは聴覚に生れる「誤聴」を強調したりするためもあるけれど、それだけではない。一つの感覚に起る「間違い＝誤作動」は、人間の全感覚にその作用を及ぼす。

江上越の「誤聴ゲーム」作品のきっかけは、北京で学んでいたときの個人的な体験に由来する。日本と中国は漢字を共有しているが、21 世紀の現在ともなると、同じ漢字や同じ単語でも「音」で発音されると、双方で同じ意味とは限らない状況が生じている。そこに生ずる誤解や齟齬に、彼女は触発された。しかしそれだけだと、言葉の意味の誤解や齟齬だけの問題にすぎない。漢字という象形文字は、一つ一つの文字（漢字）にたいして歴史的に、また地方によって、多くの異なった読み方を形成してきたし、中国本土を出ればまたその読み方が変わるのは当然の出来事だった。

そこから生じた「誤解」の問題は、これからも解決されることはないだろうし、悲喜劇を生み続けることだろう。逆に解決、ないし緩和の努力もまた続けられていくことだろう。ただ、エスペラント語も英語も世界を征服することはありえないし、そんな世界は御免である。土地と水と

風土と空気が異なれば人とその言語は異なるし、そのことには理由と必然性と自然性があるのだし、多様性はいいことなのだ。

美術家である彼女は、すぐにそのことに気づいた。そして「言葉の意味の誤解や齟齬」のレヴェルから、問題を大きく、もっと根本的な方向へと広げようとしてきている。

その一つは、国や地域の違い、つまり文明・文化の違いを浮かび上がらせるという方向である。「誤聴」が生む多様性を積極的に認める方向、といってもいいだろう。「誤聴」が不可避である以上、それをプラスと捉える考え方だ。

ちなみに、「人の顔」を描く彼女の絵画作品は、その考え方を視覚に持ち込んだ試みということができる。人の顔は不断に細かな変化をしている。「表情」と言われるのがそれだ。出入国管理官がパスポートの顔写真と眼の前の本人の顔とを見較べるのは、写真のようにそのままを写すと標榜する機械でも、人の表情の微細な変化までは捉え切れないからである。写真は一瞬しか捉ええないが、絵画は人の表情の多様性を描き得る。江上越の絵画は特徴や表情を誇張して描いていると見えるかもしれないが、そうではない。ワン・ショットでは捉え切れない人の顔を可能なかぎり綜合的に描こうとしている。「誤聴」に対応する「見誤り」を襞として織り込んで描いた作品なのである。だから、根本的には「誤聴ゲーム」と同じ方法に立っている、しかし絵画作品なのだ。

千葉成夫　江上越　2015 年

もう一つ、ありうるかもしれないと僕が考える方向は、「聴覚」と「視覚」を結びつけた（連動させた、並置させた、背馳させた）作品によって同じことをこころみる方向である。夢想かもしれないが、僕はそんなことを考える。

ちば・しげお　美術評論家。専門は近代－現代美術史、現代美術論、博物館学。現代美術の評論に携わり、日本の現代美術、東アジア地域の現代美術、近代・現代西欧美術について広く評論を手掛ける。早大学文学部卒、同大学院博士課程修了。フランス給費留学生としてパリ第一大博士過程留学。同大学博士号取得。東京国立近代美術館研究官、中部大学教授など歴任。主な著書に『現代美術逸脱史』『美術の現在地点』『未生の日本美術史』『カラヴァジオからの旅』など。1946 年生まれ。岩手県出身。和光市在住。

江上（えがみ）　越（えつ）

1994年千葉県生まれ。ドイツHFG(The Karlsruhe University of Arts and Design)大学、北京・中央美術学院に留学。現在、同美術学院博士課程に在籍。海外での豊富な経験から誤聴、誤視、誤解、情報伝達におけるズレなどに関心を抱き、コミュニケーションの本質を追求している。現地調査、文献資料を通して言語学、人類学、哲学など様々な学問領域から言語の起源による人間の本能を探究しながら作品を制作している。文化庁新進芸術家としてニューヨーク派遣、第16回千葉市芸術文化新人賞(2018)など数々の賞を受賞。また、現代美術財団賞(2020)、ソブリン・アジア美術賞（2019）のファイナリストにも選出される。2021年には「フォーブス アジアが選ぶ世界を変える30人／Forbes 30 UNDER 30」（Forbes Asia）に選出され、日本、中国、ヨーロッパを中心に活躍している。江上の絵画を著名なコレクションに収蔵している機関に、CAFA Art Museum（北京）、He Art Museum（広東）、Yuan Dian Art Museum（北京）、Tree Art Museum（北京）、E-LAND Foundation（ソウル）などが挙げられる。

江上越 Profile

2020　令和 2 年度文化庁新進芸術家海外派遣プログラム, ニューヨーク・ロサンゼルス
　　中央美術学院博士課程在籍
2019　中央美術学院大学院修了, 劉小東教授に師事
2017　ドイツ HFG 大学留学, メディアアート学科専攻
2016　中央美術学院本科油絵学部卒業

■主な個展
2021　「Social Distancing」A2Z Paris,パリ
　　「FACE BOOK —Egami Etsu solo exhibition」Chambers Fine Art, ニューヨーク
　　「にじいろ——江上越個展」ホワイトストーン台北、台北
　　「にじいろ——江上越個展」軽井沢ニューアートギャラリー、軽井沢
　　「星の時間——江上越個展」銀座蔦屋書店、東京
2020　「エントランスギャラリーVol.1 江上越」千葉市美術館、千葉
　　トーク(パリポンピドゥーセンター、千葉市美術館、UCCA 現代アートセンター)
2019　「君の名は？——江上越個展」, ホワイトストーン銀座新館, 東京
2018　「対話 4000 年—江上越個展」, 千葉市文化センター千葉芸術文化新人賞受賞プロジェクト、千葉
　　「Dialogue beyond 400 years-Etsu Egami solo exhibition」playground London, ロンドン
2017　「覆い隠された真相——江上越個展」日本東京銀座, 東京
　　「In to the light....Etsu Egami solo exhibition」βpace, ドイツ
2016　「天声人語？—江上越個展」DEHAIRIPROJECTS, 東京
　　「This is not a Mis-hearing game」de Sarthe gallery, 北京
　　「誤聴×真相—江上越個展」Horizon Art Space, 北京

■主なグループ展
2020　「VOCA－新しい平面の作家たち 2020」, 上野の森美術館, 東京
　　「3331 アートフェア 推薦展」, アーツ千代田 3331, 東京
　　「Little Fables」, ホワイトストーンギャラリー香港, 香港
　　「CAF 賞 2020 ファイナリスト」, 現代芸術振興財団、東京
　　「Gallery Collection」, ホワイトストーンギャラリー本館, 東京
　　「Spring Accent」, ホワイトストーンギャラリー台北、台北
　　「UNSCHEDULED」, 大館当代美術館, 香港
　　「Para Site Art GALA」, Para Site, 香港
　　「江上越 バーチャルスタジオビジット」, 台北当代博覧会, 台北
2019　「ソヴリン財団 アジアンアートプライズファイナリスト 2019」, 大館当代美術館, H Queen's, 香港
　　「中央美術学院修了展」, 中央美術学院美術館, 北京
　　「第七回中央美術学院大学院優秀作品展『反響』」, 中央美術学院, 北京
　　「Desert Garden」, OTA FINE ARTS, 上海
　　「8ARTIST」, A2Z ギャラリー, 北京
　　「2019WanYing Young Dream」, 万営美術館, 河北
　　「ARTNOVA100 2019」, 嘉徳芸術センター, 北京
2018　「A CITY TO WEAR 2.0 Paintings Beyond"Painting"」, アメリカシカゴアジア芸術研究所, シカゴ

「第二回 BMAB 北京国際メディアアートビエンナーレ“POST LIFEE”」, 中央美術学院美術館, 北京
「Surpassing r=a(1-sin)」, 七木空間, 北京
「Bio Art Archive Drawer-Absence of Authority」, HDK ONCURATING SPACE, チューリッヒ
「from China」, Galerie 99, ドイツ
「第六回優秀大学院生展」, 中央美術学院, 北京
2017 「Grounding 展」, ユーレンス現代アートセンター, 北京
「感知中国」, 中国美術学院陳列館, 杭州
「合法的異郷人-北京へのラブレター」, 炎黄美術館, 北京
2016 「第三回 CAFAM ビエンナーレ“Negotiating space”」, 中央美術学院美術館, 北京
「繁星計画展」, 樹美術館北京、天津古海岸文化谷天津, 麦粒美術館/韓国
「学院本色 2016」, 中央美術学院四川美術学院, 北京
「中央美術学院卒業展」中央美術学院美術館, 北京
「Neither here nor there(ボストン美術館美術大学とのコラボレーション)」元典美術館, 北京
2015 「第三回中国国際装置芸術国際芸術展」, 今日美術館、北京
2014 「第 12 回全国美術作品展覧」, 遼河美術館, 「足跡青春展」, 中央美術学院, 北京
「冬季創作展」, 中央美術学院, 北京
2013 「第 14 回東方国際美術展」, 千葉市美術館, 千葉

■主な受賞歴
2021 フォーブス アジアが選ぶ「世界を変える30歳未満の30人」受賞 (Forbes Asia)
2020 令和 2 年度文化庁新進芸術家海外派遣プログラム, ニューヨーク
フォーブス チャイナが選ぶ「世界を変える 30 歳未満の 30 人」受賞 (Forbes China)
遠山正道コレクターズプライズ受賞(3331 アートフェア)
CAF 賞 2020 ファイナリスト(現代芸術振興財団)
2019 アジアンアートプライズ 2019 Finalist(Sovereign Art Foundation 香港)
第五回芸術生活優秀卒業制作賞(中央美術学院)
WAN YING ART DREAM 新鋭作家入選(万営美術館)
2018 第 16 回千葉市芸術文化新人賞(千葉市文化振興財団)
2017 最優秀優秀賞
2016 第 12 回「画室開放日」作品優秀賞受賞(中央美術学院油絵系)
E.LAND 優秀卒業創作賞(中央美術学院)
第 17 回東方国際美術展(日本)外務大臣賞
2014 下郷優秀作品賞(中央美術学院)
社会活動賞(中央美術学院)
2013 優秀創作賞(中央美術学院)

■パブリックコレクション
中央美術学院美術館, 元典美術館, 樹美術館, E.LAND GROUP, 達美美術館、和美術館

■国際会議
2018 第 2 回北京国際メディアメディアビエンナーレ国際会議(CAFAMUSEUM)
海口仲夏文芸季 国際青年芸術論壇(海口市政府)
2020 「コミュニケーションのかたち」(千葉市美術館)
参加者:江上越、Julie Champion(パリポンピドゥーセンター)、You Yang(北京 UCCA 現代アートセンター)、千葉成夫
2021 「Etsu Egami: The third generation of post war contemporary artist」
(アメリカ・ペンシルベニア州立大学でのアーティストトーク)
「星の時間」 (銀座蔦屋書店)参加者:岩渕貞哉(美術手帖総編集長)、山本浩貴(美術史家)
「星の時間」 (銀座蔦屋書店)参加者:河合正朝(千葉市美術館前館長)、陳睨怡(台湾芸術大学美術学院院長)、鄭妍(万営美術館アートディレクター)

■その他

2015-2016
中央美術学院博士課程 非常勤講師
2015 中央美術学院美術館 Roger Ballen 展アシスタントキュレーター
2016 中央美術学院美術館 Hiroji Kubota"The Story of Looking" アシスタントキュレーター
2017 北京工業大学 デザイン学科 非常勤講師
2018 北京工業大学 デザイン学科 非常勤講師
2019-2020
中央美術学院博士課程 非常勤講師

■主な出版及び執筆

2020 《交績的目光——西方絵画 500 年》上海書画出版社
《油画》人民美術出版社 2020 年第 2 期
《油画》人民美術出版社 2020 年第 4 期
《VOCA 展 2020 新しい平面の作家たち》上野の森美術館
2017 《月刊美術》実業之日本社
2016 《月刊美術》実業之日本社
《北方美術》天津美術学院 2 月刊
2015 《月刊美術》実業之日本社

■メディア掲載

2021 月刊美術 2 月号(日本)
ブレイク前夜 BS フジテレビ(日本)
2020 読売新聞(日本)
尚流香港 TATLER HONGKONG(香港)
ELLE DECOR(日本)
芸術香港(香港)
月刊ギャラリー12 月号「アーティストと展覧会」(日本)
2019 毎日新聞(日本)
月刊美術 11 月刊 (日本)
2018 月刊美術 8 月刊 9 月刊(日本)
毎日新聞(日本)
2017 天津電視台《泊客中国》0326 半年的記録片拍撮
月刊美術 8 月号
2016 CHINA DAILY USA(US edition) January 29-31, 2016 "An artistic marriage of great convenience"

江上越×河正雄　作品目録　（1）

①

1940　1歳

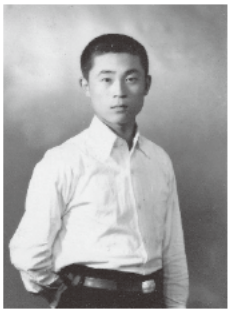
②

1944　4歳

③

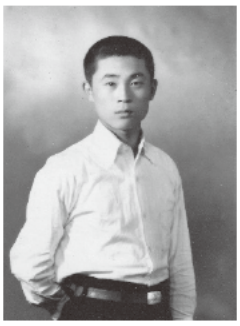
1949　9歳

④



1954　14歳

⑤



1954　14歳

江上越×河正雄　作品目録　（2）

⑥

1956　16 歳

⑦

1958　18 歳

⑧

1960　20 歳

⑨

1963　23 歳

⑩

1963　23 歳

江上越×河正雄　作品目録　（3）

⑪

1964　24歳

⑫

1966　26歳

⑬

1987　47歳

⑭

1988　48歳

江上越×河正雄　作品目録　（4）

⑮

1995　55 歳

⑯

1995　55 歳

⑰

2003　63 歳

⑱

2011　71 歳

江上越×河正雄　作品目録　（5）

⑲

2020　81 歳

⑳

2020　81 歳

河正雄コレクション　資料集　第４号

江上　越

2021 年 8 月 31 日発行

発　　行　　河 正雄

https://www.ha-jw.com/
編　　集　　菊地 正志
印刷製本　　株式会社双信舎印刷
非売品

表紙写真：制作中の江上越　　裏表紙絵：江上越「コミュニケーション」

河正雄コレクション資料集（既刊紹介）

■第１号（2020 年９月発行）
関根伸夫（「もの派」作家）
往復書簡／「散華」作品と原図／李禹煥「関根伸夫」論

■第２号（2021 年１月発行、３月第２刷）
川田泰代（ジャーナリスト・平和活動家）
涼州詞と泛海詩／書がつなぐ縁／陳玉璽救援／中国との絆／評伝

■第３号（2021 年４月発行）
岩田　健（彫刻家）
評伝「岩田健彫刻の歩み」／兄の碑／「永瀬四朗日記」と関東大震災

河正雄コレクション　資料集　第４号

江 上　越